

命吾等の手にあるものを吾等徒らにゆく春の面影
に別れを惜むべきにあらす、夏の山路の青葉若葉
秋の高根の月の色、冬の窓うつ時雨の音、いづれ
か天地悠久の曲眉豊頬にあらざる。湖畔に開かれ
しこの一頁、吾に或物を讀みつくさしめた。わが
戀人は、伊太利乙女の繪すがたばかりかは。

短歌

○ 渡しよぶ朝川づゝみ雨はれてみどりにかすむ柳影かな
淺井 眞末

○ 破し琴にそゆる輿やる脊かれて薄色袂いろあせにけり
金 森 千代

霞こき花野にそゆる迷ひては行くてはかなき我思ひ哉
朝づく日眩かりせば垂頭てはづかしむかな海家のはな
春なれや涙の谷をそと出で、人にちかづく鶯のこゑ
うらゝ日を野に若菜つむ乙女子の裳にもゆる春の炎陽
日あたりの障子のやれ間そともれて花の香のせぬ春の
なご風

○ 美濃 新子
あゝ何を夢見て笑ておはすこと母の御顔を守る夜半哉
白雲の凝りてなりに、君かとも思へおん頬のあまり清
きに

○ 鈴木 野石

寛の神が呪ふかの様ひゞき來る水車のほとり紅桃のち
る
臙夜に君が奥津城とむらへば我胸みだし花吹雪する
○ 菅原 櫻 心

うつむきて秘めし思ひに様も似て奇しき姿の姫百合の
花
草木の美しき花將た鳥のこゑうるはしき春の森かけ
思ひては涙ぐむ君そやにもとに泣きたる日を忘れ得
で

○ 小野 春香
黄金しく菜畑十里うすかすむかなたに白き帆は眠るよ
う

咒はしき我季の音をたどり來し子規かな青葉ゆふまど
庵かこむ梅か香ゆりて鐘ぞ鳴る野は霞する明方にして
○ 朝倉 みち子

新らしく世によみがへる心地しぬ朝明け清き鶯のこゑ
見るがうちに疑の雲ひるごりてあはれふきしく花吹雪
哉

○ 清水 澄
春の日やふたりの胸に糊引きて物皆清き彩かすみ哉
花くもり曇りし胸の扉をゆりてひやく夕鐘つめたか
らずや
* * * * *

○ 春の宿姉と妹の二人は臙夜かたる
花のおはしま
起 雲

○ 琴抱きて二條を下る少女子の紅梅衣に、
春の雪ふる

（投稿） 伊勢白子局区内 眞宮 宛